京鹿子

1月号　京鹿子祭特集号

―近詠―

鈴鹿呂仁
拾掬集　その十六

爪の香よ蜜柑の蔕のほの甘し

蜜柑むく自我とにきびの一つ消ゆ

夜更しや行方知れずの毛糸玉

毛糸編む打算の消ゆる指白し

紅葉炎ゆ思考の面舵いつぱいに

聞き耳の羅漢と笑まふ木の実径

PDF= 俳誌の salon

落葉ふむ夢は欠片に落葉ふむ

正夢と覚しきデジヤビユ初氷

文塚の千の戀の字雪催ふ

文塚や恋に迷へる穴まどひ

晩年は小町坐りに春待月

諸人の千々の乱れや返り花

末枯るる有相無相の池の面

四人目は片言の祝き初雀

PDF= 俳誌の salon

―近詠―

蜜柑島

鈴鹿　仁

枯蓮の無音の刻の風の美（い）し

冬めくも小町ばなしに華が咲き

一系の句碑のかがやき蜜柑島

―追懐―（その二十六）

煮凝の魚の目にある白き海　〔平成十二年作〕

極月の水の冥さに鯉の息　〔平成十二年作〕

PDF= 俳誌の salon

―近詠―

和田　照海

太刀魚舟

それぞれに水脈曳き戻る太刀魚舟

むくの群追はれてをらず伸縮す

寄せ墓に小しぐれ至る毒ガス島

脱藩の畦径定か穆の穂

折紙は豚に仕上がり色鳥来

PDF= 俳誌の salon

英華採集

本陣のたたみ廊差す後の月　　草津　山本　静

戦国時代の城攻めは、城が堅固であればあるほど長い戦となる。陣をはった総大将が眺めたであろう満月は、ひと月が経ち同じ場所で後の月を見ることになる。古来、満月と後の月は両方を見る慣わしがあることを踏まえ、現在の本陣跡の建物に差し込んでくる月を、その時の武将に思いを馳せて愛でている。季語の「後の月」が効果的に響いている。

大木の天辺搦め葛の鬨　　京都　藤本　啓子

葛が蔓延る原を真葛原というように横に広がるイメージが強いが、茎の長さが六メートルを超えることもあるから大木へ絡ませることも出来るであろう。掲句のように大木の天辺を制圧した葛が、勝ち鬨をあげていると見立てた作者には小さな喜びが、芽生えたものと思われる。「搦」という字を充てたことも効果的である。

青ふくべ初孫系図太らせて　　兵庫　久保　みどり

初孫は、実の子供よりも可愛いというのが定説であるが、こればかりは経験体験してみないと解らないだろう。そして、初孫を抱いてみると一番気になるのは誰に似ているかということ。「系図太らせて」にその答えが出ているが、季語「青ふくべ」と置いたことで句の諧謔性が生まれ読み手に俳味を感じさせている。

PDF= 俳誌の salon

近詠

松本　鷹根

比良晴れる

早起きの朋窓浄机文化の日

立冬の木漏れ日辿る神祇坂

木漏れ日を流す御手沈石蕗咲けり

朱の宮檜皮に名日蓄へる

湖凪ぎて柿はたれわに比良晴れる

塩貝　朱千

渡り蝶

月を待つ松の樹齢に闇が巻く

秋暁や世のはじまりのやうな赫

藤袴に逢瀬のやうな渡り蝶

実紫ふふふと揺れて手を清む

面影はけふも泣虫野紺菊

PDF= 俳誌の salon

神麓集

うそ寒　藤岡紫水

逢へぬ日日無花果夜毎熟れに熟れ
灯を消せば水に点りし秋のこゑ
茸山を守る一條縄砦
やや寒や表紙はがれし漫画本
うそ寒や軒より低き蛾眉の月

寒牡丹　沼田巴字

初景色老人遠き目をしたり
初夢の写し出したる涅槃かな
寒声の偈の高らかや禅の寺
合掌の形いろいろ寒牡丹
つつましく生きる仕合せ去年今年

神棚　丸井巴水

ひぐらしを聴き少年の儘でゐる
神棚へ背を向け注連を編み修む
二歩三歩遅れ始める枯野坂
白息を鎮めん神は朱を好み
初日の出神在りてこそ片乳房

良薬　植村蘇星

無一物されど凛然枯すすき
すすき穂の揺るる稜線西明り
夕ざれやすすきの揺るる遠こだま
稿一つ終へて虫の音友とせり
孫の顔見るが良薬竹の春

積木のやうに　北川孝子

夜の障子積木のやうに齢重ね
こほろぎや猫ゆつくりと裏返る
山容のこぞりて優し初紅葉
やはらかに昆布煮上る萩月夜
秋めきし川夕映えの余情かな

葡萄　直江裕子

耳鳴りの耳からひと粒マスカット
水澄んで私のなりたい木が見える
十月の森に失意を置いてくる
大花野人に委ねることを知り
思ひきり人を愛せずはや九月

PDF= 俳誌の salon

目鼻あり　高木晶子

しりとりのやうに繋がる彼岸花
狗尾草修正不可の向かふ見ず
破れ蓮老人となる面白さ
コスモスのさわさわと消す出世欲
新米の一粒づつに目鼻あり

衣被　伊藤希眸

はじまりは受精卵から秋彼岸
忘れ事多し路傍にちちろ鳴く
衣被原始は衣裳つけぬとも
名月やこの世に逢えぬ人と会ふ
秋暑し手帳にメモの読めぬ文字

ちんちろりん　木戸渥子

長き夜や母にならずに伯母になり
秋夕焼一抜け二抜け金蘭簿
あちこちに乾電池要る夜長かな
彼との距離計つてをればちんちろりん
眠さうな街路樹気付けば裸木に

ジパング　奥田筆子

銀杏のジパングお湯の出るトイレ
十三夜巧言ひとつ笑納す
魚は魚を人は人食ひ神無月
大菊の首枷わが足のテーピング
土瓶蒸し校歌だんだん痩せてゆく

ひよんの笛　井上菜摘子

ひよんの笛吹くため並走を逸れる
いちめん曼珠沙華手遅れであり
黄葉しぐれ暫し見てゐる占師
さざなみや攫はれてゆくカンナの黄
ひろびろと眉間ありけり初紅葉

大花野　村田あを衣

白萩の夜の白さに鶴を折る
あやとりの橋はくづさず星今宵
抽出しにくれなゐの紐近松忌
悪筆は恋のはじまりアマリリス
一切を受け入れ暮るる大花野

PDF= 俳誌の salon

京鹿子大賞受賞作品

福山市　亀井　福恵

浮かびてはつつじの彩となりし鯉
点滴の急ぐ気配のなき薄暑
万緑や堰かれし水に魚跳ねる
本堂の涼風釈迦と分かちあふ
子らの声染めてひろしま忌の夕日
白芙蓉ひとり寡黙をとほすなり

間引菜の色に出でたる土の神
寄り道も自習のひとつ祭笛
淡交のほどよき間合吊忍
銀漢のかなたに消えし魂惜しむ
雁渡し訃報といふは不意に来し
遺されし夜はみどりに青葉木菟

PDF= 俳誌の salon

睡蓮や音なく落ちる砂時計

回天の兵は還らず青葉木菟

龍の玉円相を問ふほとけ径

晩節へ助走の途中雁渡し

円相をこころに秋の水車かな

秋深む仏像になき喉ぼとけ

秋天へ大工の飛ばす鉋屑

風に散り風なきに散り冬紅葉

鶴来る天為の彩を光らせて

山眠るいちぶしじゆうを懐に

夕星をあげ依代の冬木立

呼べばまた木霊の応ふ別れ霜

釘を打つ二月の空のまんなかに

鳥雲に大空の弦鳴らしつつ

春北斗うべなひがたき訃の灯

わたつみを誘ふさくら貝ひとつ

乳張りし日の遠かりし柏餅

仁和寺を結びとしたる花行脚

PDF= 俳誌の salon

京鹿子新賞受賞作品

福知山市　芦田しずく

艸の字や夏野の草の生きる状　夢一つ追ひつ競り合ふ鯉幟

峡の灯はかあちやん食堂提灯花　嫁取りを漏れ聞く窓辺春の風

砂時計ついりの砂の落つる音　破れ窓の恋の通ひ路春の猫

小満やハナマル増ゆる一年生　句碑高く樹下に仰ぎし花洛の忌

みどり児の吸いつぐ胸乳新樹光　試歩の庭朝よりゆるむ牡丹の芽

PDF= 俳誌の salon

うすらひや遠き日のごと玻璃のごと

紅梅の耐へ来し今ぞ韓くれなゐ

凧あげや風をあやつる父と子と

人日の居間に戻りし余白かな

三猿に好奇の心老の春

大鍋や一村総出の達磨の忌

耳打ちを幾度試すや小春の児

雪もよひレジ待つ列の長きこと

村さかひ枯葉の溜まる出征碑

句読無きメールの届く小春かな

綿虫や叩けば消ゆる愁ひあり

現世の辻棲合はずそぞろ寒

十六夜の里の影濃し静心

百年の大整理終へ露のちる

いとし子と手取りおろがむ大文字

福禄の白蛇になれず穴まどひ

秋の陽の真中に干すや涙法師

小鳥来るとほりすがりの縁なれ

PDF= 俳誌の salon

京鹿子新賞受賞作品

福山市　石原　孝人

箒目に影遊ばせて初雀　銀ぶらを夢見るマネキン春の雪

楪や故郷は老いし人ばかり　種袋振りて明日の音を聴く

城郭をめぐる琴の音初松籟　散る花に風が風追ふ吉野山

探梅の万の香りの起伏かな　跡継ぎのことを話して柏餅

山里の黙ゆるめたり梅三分　蛍烏賊湾のかたちに街あかり

PDF= 俳誌の salon

走り梅雨考の匂ひの釣り道具

子別れに鳴き止まぬ牛走り梅雨

雷鳴や額を飛び出す志功の画

白雲の影が翳追ふ夏野かな

山家の灯見えぬて遠きすすき径

潮の香を風に掬ひて今朝の秋

前略と書きて置く筆初紅葉

新蕎麦や癖字の目立つ古暖簾

見はるかす嶺の起伏や鰯雲

新海苔や一家総出の天日干し

追憶のページ余して毛糸編む

ポインセチア京の舞妓の厚化粧

村中の音を奪ひて深雪晴

お地蔵へ身幅の雪を掻く媼

風の音ここより粗き雪囲

灯を消してよりの激しき虎落笛

風哭くやここは吹雪の奥越後

虎落笛夢のかけらの二つ三つ

PDF= 俳誌の salon

京鹿子新賞受賞作品

京都市　森川　絢子

やはらかき嬰抱くやうに雛飾る　ガラス器の濁り許さず若楓

箸を割る桜づくしの祝膳　待つことの増ゆる習ひや余花の雨

胸きゆんとスラブ舞曲や春の宵　百歳をしなやかに生き青芒

木漏れ日のやうな囀りチヤイム鳴る　庭隅に蛇見し後の手を洗ふ

雛菊をいつぱい咲かせても淋し　父の日の机上に山河写真集

PDF= 俳誌の salon

大西瓜廊下の隅にある怠惰

潮の香のリボンに残る夏帽子

蝉声に搦めとられし楠大樹

大夕焼そうして誰もゐなくなる

菩提樹の花に突然会ひたくて

悪戯な風のかたちに箒草

松手入れ鋏の音も三代目

あら草や地球はみ出しバツタ飛ぶ

この山を越えれば信濃葛の花

一叢の白曼珠沙華愛されて

障子張る昭和のくらしに妣のゐて

銀スプーン小箱にしまふ十三夜

瓦葺く音も軽やか小六月

母と子のこゑの向かうに冬の虹

二月のひとつふやせる貼りぐすり

キヤンバスの白き教会しぐれけり

悴かみて往きつもどりつする話

落葉道トランペットの音走る

PDF= 俳誌の salon

募集大作賞

京都市　片山熙子

木の芽風

木の芽風このやさしさに遊びをり
春を待つ身の暗流にポタージュを
初蝶を放ち大地の自照かな
忘恩をかさねて白む山ざくら
驚けばとべるにはとり夏落葉
さみしくてじやが薯の芽がほこほこと
白夜めき古き鏡にものがたり
大あげは羽化せむ闇を想ひをり
哀楽も忘る晩涼の七つ星
桐一葉捨つべきものか翳もちて
コスモスの小さき風を抱いてみる
遠山の薄日を妬む花八つ手
しづかなり胸の破船を包む霧
芦枯れて対岸他国めきにけり
冬麗の石旅人を待つごとし

PDF= 俳誌の salon

募集大作賞

京都市
小山和男

朧月

踏み込みの一歩を磨く寒稽古
大佛に吸ひ寄せられい桜東風
鉛筆の片減りたどる蜷の道
なめらかな信条蛇が穴を捨つ
春愁や飛び石なかば立ち止る
名鐘は撞かず朧の月明り
花石榴町家の井戸に釣瓶なし
水無月や叱つてくれる人の減り
鬼灯の青さきのふと違ふ風
夏座敷コップ二つで足りる午後
短命は浄し無数の蝉の穴
白萩に隙なし抹茶すすりゐる
烏瓜つま先立ちの岩場越す
桐の実や飾り鎧の乾き切る
軋みなく門鎖す十三夜

PDF= 俳誌の salon

双滴賞受賞作品

呂仁三賞

スローなジヤズ夜の秋へと変換キー　上野　紫泉

子子の水の退屈なかりけり　横溝　和恵

妻と言ふ肩書取れば木守柿　澤野井博子

仁三賞

端居して頃合ひと言ふおつきあひ　磯部　時枝

ポケットに忍ばせてゐる夏休み　厚芝　唯菜

余生とは言はず与生や更衣　植村　蘇星

PDF= 俳誌の salon

京鹿子集

鈴鹿呂仁選

本陣のたたみ廊差す後の月
格子戸や通し土間抜け後の月
声援のかき消されさう黍嵐
新蕎麦や宿場なごりの石の臼

草津　山本　静

大木の天辺搦め葛の関
鹿の子百合するつと百越ゆ健康寿命
雑布は固く絞る性萩こぼる
秋高し足の機嫌の良き吟行
青ふくべ初孫系図太らせて
ややの口乳と一緒に吸ふ秋陽

京都　藤本　啓子

野の花や並ぶ互の氏知らず
星合ふ夜レコード針は噎びつつ
裏木戸の色なき風の吹くを見し
二人して秋の砂漠をハネムーン
休暇明けママは静かに紅茶飲む
米国の名月一日遅れけり
音もなく凪の時間や庭の木々
花水木今年の色は白白と
オハイオのブルーの空に木の緑
夏深しそろそろ芝生色あせて

アリゾナ　伊吹　之博

兵庫　久保みどり

オハイオ　水谷　直子

PDF= 俳誌の salon